今年の８月は戦後70年ということもあり、いつも以上に「戦争と平和」について考えた。

下記原稿がジャーナリスト８月号に「安倍政権を『べた褒め』するマスコミ』というタイトルで掲載された。

今日から９月だが、日本の行方を左右する戦争法案審議に目が離せない。

『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」2015年８月号

猛暑の戦後７０年夏は、ひときわ「戦争と平和」に関心が集まる。政府は８月１４日、安倍談話なるものを閣議決定した。決定に至るまで二転三転したが、政治状況を反映するものだ。メディアの評価も大きく割れた。

とりわけ朝日と読売の１５日社説は対照的だ。朝日は談話全体を通じて感じられるのは、自らや支持者の歴史観と、事実の重みとの折り合いに苦心した妥協の産物とする。「何のために出したのか」、出すべきはなかったと厳しく批判する。

読売は先の大戦への反省を踏まえつつ、新たな日本の針路を明確に示したと前向きに評価する。侵略を認め、お詫びも首相の真剣な気持ちが十分に伝わると述べる。この問題に一定の区切りをつけるよう、中国や韓国にも、理解と自制を求める。

米メディアも安倍首相自らの言葉で謝罪がなかったと批判するが、読売の「べた褒め」主張には首を傾げざるをえない。読売は安倍政権「応援団」としての姿勢をさらに強めている。５日は辺野古問題で「事態打開に知事も頭を冷やそう」、１２日に川内原発再稼働を「電力安定の重要な第一歩だ」とし、１４日には「安保法案成立で抑止力の向上を」と社説で求める。

読売同様に、安倍政権の強力な「応援団」なのがＮＨＫだ。

安保法案の衆院特別委「強行採決」の日に国会中継をせず、大きな批判を浴びた。それから１ヶ月後の安倍談話のニュース報道のひどいこと。延々と安倍首相に「独演会」のごとく語らせ、よいしょする。首相「ご指名」の籾井会長にして、当然かもしれないが、公共放送を名乗る以上、許せない。

その一方、戦後７０年特集に力作が多く、あらためて歴史の重みを感じた。なかでも毎日「戦後７０年 これまで・これから」、中日１５日の瀬戸内寂聴さんの「手のひらからの平和論」が印象に残る。

それと朝日１３日「路傍の墓 母の抵抗」が心に響いた。一人で育てた息子を戦争で失った高橋セキさんの話だ。セキは息子が忘れられないよう、県道脇に墓を建てる。社会が忘却することへの静かな抵抗だ。

取材後記には「無謀な戦争はなぜ起きたのか。国内外に何をもたらしたのか。記憶し、記録する。そして問い続けることが戦後世代の責任ではないか」とある。

（2015年９月１日）